

見えない硬直の正体

エリート剣士を襲った「イップス」の謎と、
心身条件反射療法（PCRT）によるパラダイムシフト

期待を背負ったエリート剣士の身体が、突如として凍りついた

客観的プロフィール

高校1年生（男性）

中学時代、
栃木県大会優勝

剣道推薦による
名門校進学

父親・親戚が
剣道指導者という

「剣道一家」

フォーム修正の努力が裏目に出たのか、
練習を重ねるほど両肩は固まり、
全く振れない状態へと陥った。

主観的苦痛と症状

上半身の硬直：相手と対峙し、振りかぶってから打ち下ろせない（システムフリーズ）



足の激痛：踏み込む際、左足首から甲（第2～4中足骨）にかけての疼痛



重心の喪失：
立位・歩行時でも重心がブレる不安定感



水面上のアプローチ：一般的な身体検査が示す限界



身体構造（ハード面）の異常は確かに存在する。しかし、これらは「原因」なのか、それとも「結果」なのか？

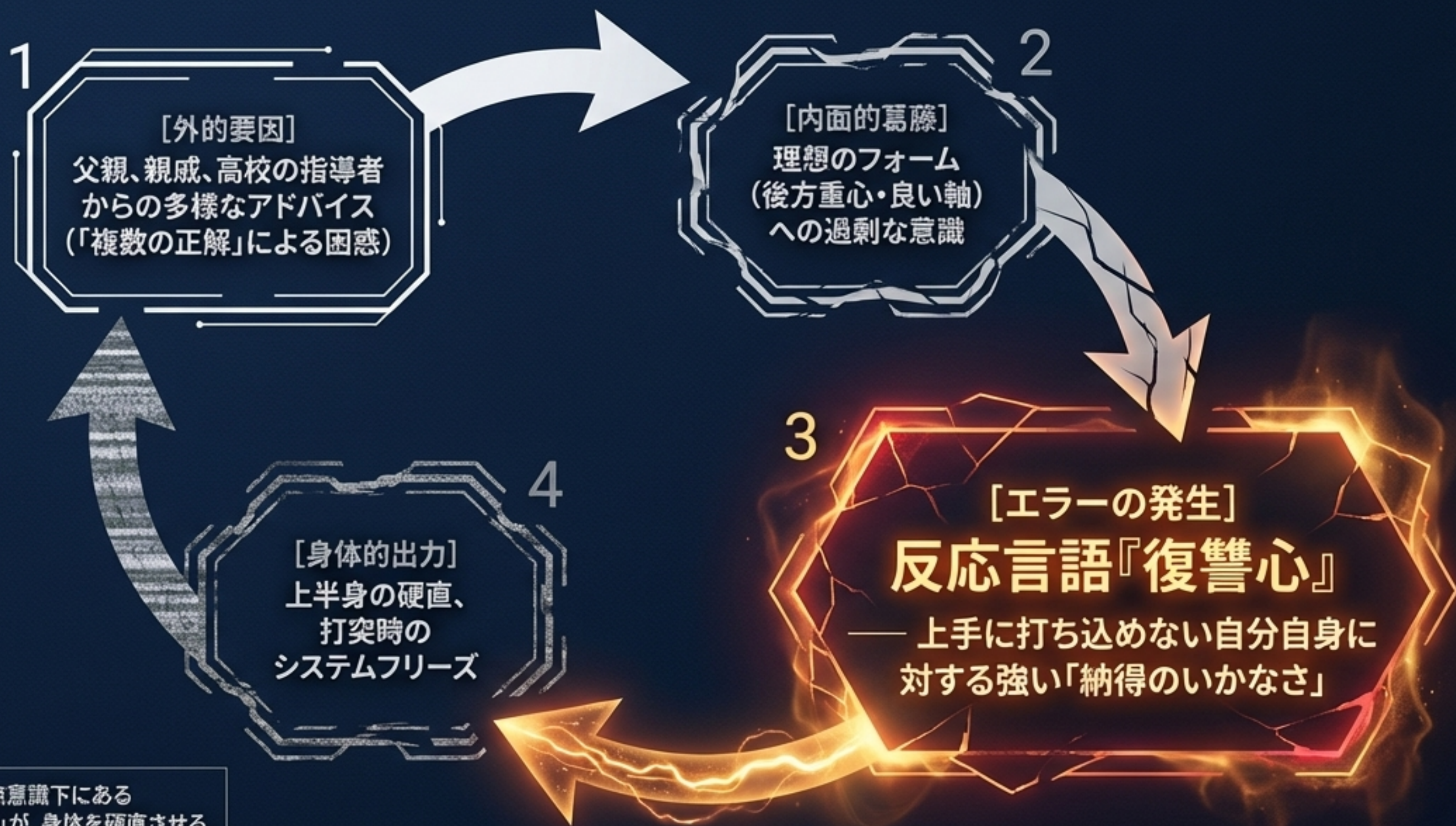
「相手と対峙するイメージ」
だけで生じる筋肉の緊張
(PCRT目安検査で陽性)

ハード面（身体）の調整だけでは、イップスは治らない

介入フェーズ	初回治療	2~4回目治療
アプローチ	身体系EB（ハード面）のみ	情報系EB（ソフト面・PCRT）の追加
調整内容	脊柱・関節・筋肉の調整	意念調整・反応言語（キーワード）の抽出
症状の変化	全く変化なし (CGI-I: 4/7、予期不安 10/10)	劇的改善 (CGI-I: 2/7、予期不安 2/10へ低下)

筋骨格系の治療（水面上のアプローチ）だけでは、相手と対峙した際の「硬直」は解除できなかった。脳への「情報系」アプローチが不可欠だった。

脳の誤作動信号：複数の正解が引き起こした「システムエラー」

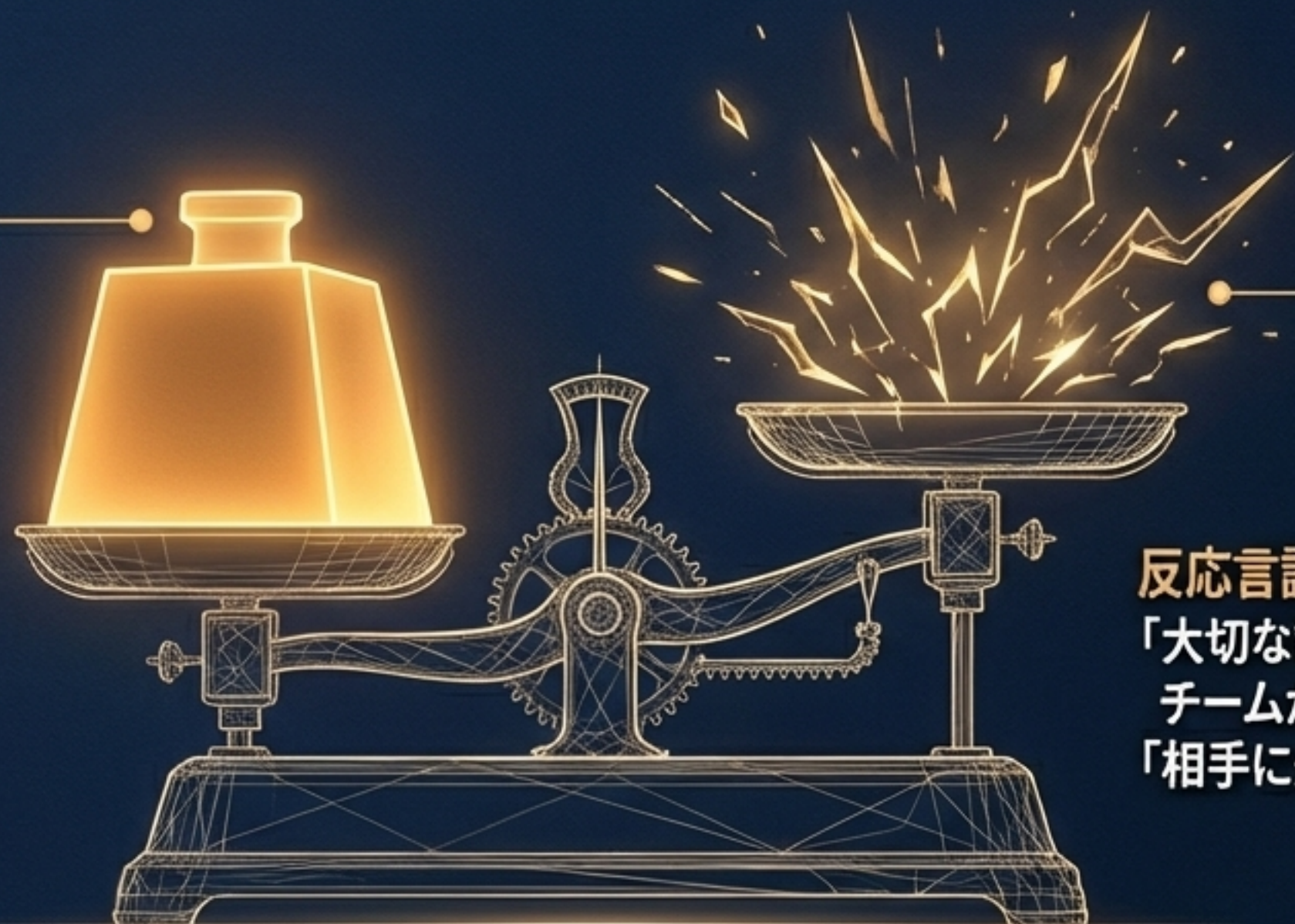


Context:

PCRTの検査により、本人の無意識下にある「復讐心（納得いかない感情）」が、身体を硬直させるバグ信号となっていることが特定された。

プレッシャーの構造:「貢献」という重圧が「恐怖」に反転する瞬間

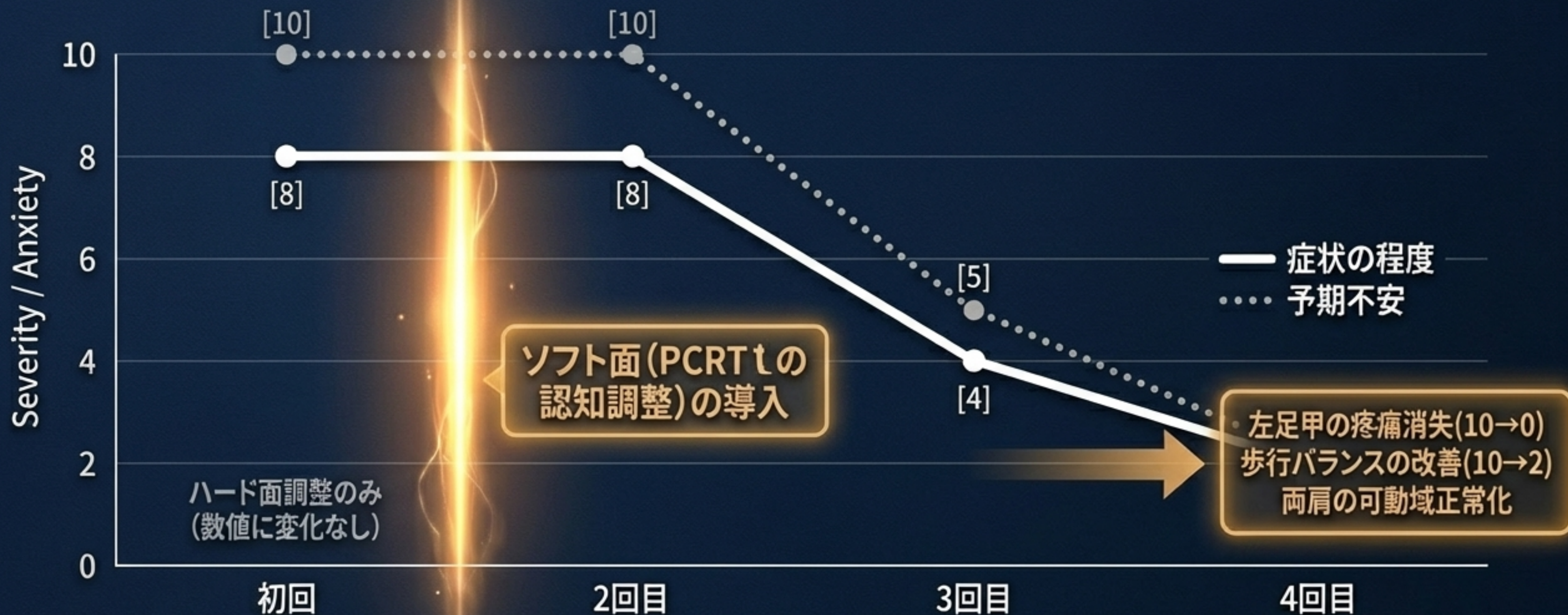
反応言語『貢献』(心への重り):
「自分が試合で結果を出して、
チームが勝つこと」
(貢献度70%の自己評価)



反応言語『恐怖』(引き起こされるエラー):
「大切な試合で自分が負ければ、
チームが負ける」
「相手に先に打ち込まれるのではないか」

選手なら誰もが持つ「勝ちたい」「チームに貢献したい」という純粋な想い。それが無意識のうちに過剰な義務感(出すべき)へと繋がり、神経系をバグさせる「誤作動記憶」として定着していた。

認知の書き換えがもたらした、劇的な数値の改善



誤作動記憶 (感情・価値観) が陽性から陰性に変化した瞬間に、物理的な痛みと硬直が消失した。

心身一如: イップスは「技術不足」でも「身体の故障」でもない

脳のバグ(誤作動記憶):

イップスは、過剰な期待、多様な情報、そして強い責任感が生み出した神経系のエラー出力である。

新しい治療のパラダイム:

フォームの修正や筋骨格へのアプローチで行き詰まった時こそ、「心と身体の繋がり」という見えない領域に踏み込む必要がある。



見えない心の動きの顕在化:

「ただ、そういう想いの自分がいるのだな」と客観的に認識する。それだけで、脳から身体への異常信号はリセットされる。

身体の声聴くことは、脳の声聴くこと。

一人として同じ骨格、性格の人間がないように、その症状の背景にある「物語」も一人ひとり異なります。
見えない誤作動を紐解くことで、選手は再び、自分自身の剣を振ることができるのです。

